

高崎市文化財調査報告書第163集

真町Ⅱ遺跡

高崎駅周辺(西口)土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

1999

高崎市教育委員会

序

高崎市は、古くから交通の要衝として栄えていました。現在では、交通は勿論、文化・産業の交流拠点都市としての役割を期待されており、来たるべき 21 世紀に向け年々発展を続けています。

その発展のために、市街地の再開発によるビル・マンション等の建設、住宅団地の造成、都市計画道路による道路の拡幅・新設工事等が行われ、高崎市内の景観も大きな変化を遂げております。

しかしこのような開発の影で、地中に眠る貴重な埋蔵文化財が破壊されているという事実があります。

本書は、真町における道路拡幅工事のため、やむを得ず破壊されてしまう部分についての発掘調査成果をまとめたものです。この資料が当地域の歴史解明に役立つことを期待しております。

最後になりましたが、発掘調査に理解を示し、御協力いただいた地元の皆様、並びに関係各機関の方々に心より感謝申し上げます。また、発掘・整理作業に携わった方々に厚く御礼を申し上げ、序といたします。

平成 11 年 3 月

高 崎 市 教 育 委 員 会
教育長 砂 田 威 夫

例 言

- 本書は、高崎市都市計画事業高崎駅周辺（西口）土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）である。
- 本遺跡は、群馬県高崎市真町 20－2～37－2番地先に所在している。
- 発掘調査は、高崎市教育委員会管理部文化財保護課埋蔵文化財係が行った。期間は平成10年9月7日から同年12月26日である。また、整理作業は平成10年10月12日から平成11年3月26日まで断続的に行った。調査組織は、〈事務局〉神戸 聖語・村井田 雅明・倉沢 かおる〈調査担当〉田村 孝・金井 英一
- 本遺跡は高崎市教育委員会の遺跡番号で 325 である。
- 本遺跡の発掘調査で得られた出土遺物・図面・写真等の資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
- 本書の編集は田村が担当し、執筆は田村、金井が分担して行った。挿図作成等は、担当者の指示のもとに次の者が行った。小嶋 明子・佐野 静代・関口 真美・武井 苗子・田島 いつ江・谷口 清美・田村貴久江・湯浅 綾子
- 遺構の写真撮影は田村・金井が、遺物の写真撮影は中村 貢がそれぞれ行った。
- 本遺跡の発掘調査において、表土の掘削及び埋填は井上総合リース株式会社、基準点測量は株式会社高崎測量、空中写真撮影は（株）フジテクノ、木製品の保存処理は（有）武蔵野文化財修復研究所にそれぞれ委託して実施した。
- 発掘調査にあたり、地元関係者・高崎市役所都市計画部区画整理 1 課にご協力いただいた。
- 獣骨歯の同定は宮崎重雄氏（県立大間々高校）、遠構内の花粉分析と寄生虫卵分析については（株）古環境研究所のご協力をいただいた。
- 櫻井一雄家文書「遠御構筋繪図」については、高崎市役所総務部市史編さん室から提供を受けた。

〈発掘調査参加者〉（敬称略、五十音順）
石原 義雄・井上 幸雄・近藤 四郎・佐野 静代・武井 苗子・田島 いつ江・野中政二・馬場 優・本間 登・三輪 辰雄・湯浅 綾子

凡 例

- 遺構には次の記号を使用し、01 からの通し番号で表記した。ただし、S D 04 は 1 区・2 区にまたがるため、1 区・2 区をつけて表記した。

S D＝堀・溝、S K＝土坑
- 遺構平面図は、上端を太線で、下端は細線で表現した。また、北方向は、国土座標第Ⅸ系による座標北を示している。
- セクション図・エレベーション図の左上の 4 桁の数字は標高を表し、単位はメートルである。
- 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1996 年度）を用いた。
- 本遺跡において検出された主なテフラの記号、年代は次のとおりである。

	H r－F A	榛名山二ツ岳火山灰	6 世紀初頭
	A s－C	浅間山C軽石	4 世紀初頭
	A s－A	浅間山A軽石	1783（天明 3）年
		遺物の観察表の分類基準は『内藤町遺跡』（新宿区内藤町遺跡調査会 1992）に準拠した。	

目 次

序

例言・凡例

I	発掘調査の経過	1
1.	発掘調査に至る経緯	1
2.	発掘調査の方法と経過	1
II	遺跡の立地と環境	2
III	遺跡の概要と土層	4
1.	遺跡の概要	4
2.	調査区域内の土層	4
IV	検出した遺構と遺物	6
1.	第 3 面の調査	6
2.	第 2 面の調査	8
3.	遠構（S D 04）の調査	16
4.	第 1 面の調査	20
	遺物観察表	25
	遺物実測図・写真図版	28
	遺構写真図版	42

I．発掘調査の経過

1. 発掘調査に至る経緯

今回発掘調査が実施された高崎市真町は、高崎駅から北西へ約 100 mに位置する。J R 信越線・上越線の西側のこの付近は、かつては倉庫、会社事務所、工場と商店及び一般住宅の混住地区といった状況であった。昭和 57 年の上越新幹線の開通とともに土地の利用状況は大きく変わってきた。このような状況の中、高崎駅西口周辺の土地区画整理事業地に組み入れられ、現在施工中であることから商店及び一般住宅が減少し、駐車場や空地が目立つようになってきている。区画整理事業に伴い埋蔵文化財の発掘調査も計画され、平成 7 年度には東二条線が拡幅される部分の調査が真町Ⅰ遺跡として実施された。ここでは近世の高崎の城下町を区画する「遠構」と呼ばれる堀跡や、高崎藩の下級武士の屋敷跡などを確認している。今回の拡幅工事場所についても、同様な遺構の存在が予想されるため、事業の担当課である区画整理 1 課と保存の方で協議を重ねたが、既に事業は進行しており、計画の変更は不可能であるため、やむを得ず破壊を受ける部分について本調査を実施し、図面・写真などによる記録上の保存を図ることになった。平成 10 年 9 月より担当職員 2 名を配置し、発掘調査にあたった。

2. 調査の方法と経過

（1）調査の方法

今回の調査対象地は、真町における道路拡幅部分で、東二条線の西側に沿った地区である。平成 7 年度調査の真町Ⅰ遺跡の北側に位置している。拡幅部分は、現状道路に沿って南北方向に長く延びているが、隣接駐車場への出入り口があるため、その部分を残し、調査区を 2 区画に分け、北側区画を 1 区、南側区画を 2 区と設定した。また、調査区内の水道管やガス管などの埋設状況を確認するため試掘調査を行った結果、2 区において現在使用されているガス管が東西方向に 1 本埋設されていることが分かったため、この部分は掘り残すことにした。なお、調査区が道路に接しており交通量も多いため、危険防止対策として調査区画の周囲にガードフェンスを設置した。また、湧水が想定されたため水中ポンプ用の仮設電柱も設置して調査にあたった。周辺地区の調査例から、遺構は重層していることが考えられ、加えて調査による排土を置く場所が他に確保できないことから、1 区の調査を先に行い、排土を 2 区に置き、2 区の調査はその逆で実施した。各区とも遺構面として 3 面の調査を行った。第 1 面は炭殻が多く検出される面、第 2 面は浅間 A 軽石を多く含み、炭粒が混入する面、第 3 面は黒色粘性土面であった。遺構測量については、国土座標に基づく基準杭の設置・水準点の移設を測量業者に委託して実施した。遺構平面図については 1／20 及び 1／40、セクション・エレベーション図については 1／10 及び 1／20 を基本として実測を行った。一部危険を伴う部分の実測については写真測量で行った。記録写真については、35mm モノクロームフィルム及びカラーリバーサルフィルムを併用し、撮影を行った。

（2）調査の経過

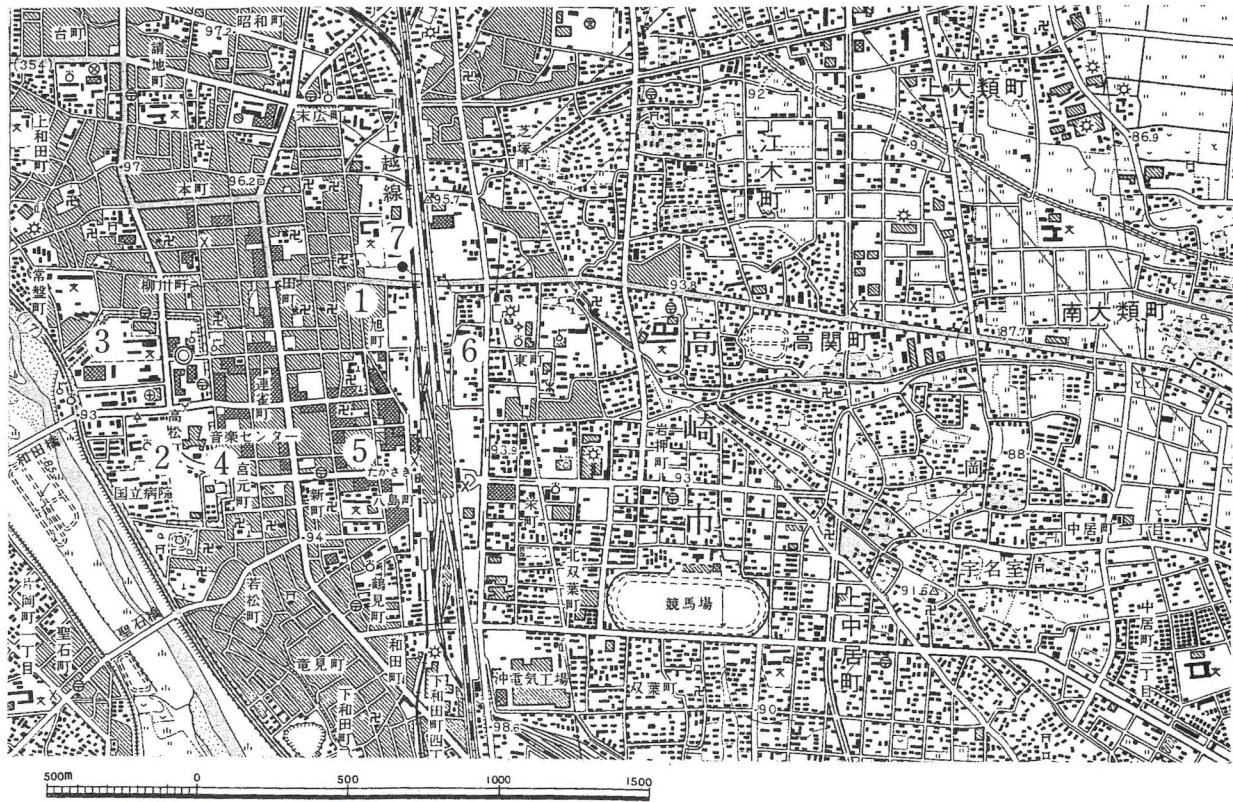
1998 年 9 月 7 日（雨）	11 月 17 日（晴れのち曇り一時雨）
発掘調査準備。	2 区、1 面目発掘調査。
9 月 22 日（曇り）	11 月 30 日（曇り）
1 区、S K 10 発掘調査。ピット・土坑写真撮影。	2 区、2 面発掘調査。A 軽石処理溝検出。
10 月 15 日（曇り）	12 月 10 日（晴れ）
1 区、2 面目遺構確認。溝・土坑発掘調査。	2 区、S D 04 発掘。漆椀・骨・歯出土。
10 月 30 日（曇り）	12 月 24 日（晴れ）
1 区 S D 04(遠構)発掘調査。S D 03 遺物上げ。	2 区、3 面発掘調査。実測。遺物上げ。
11 月 5 日（晴れ）	12 月 26 日（晴れ）
1 区、3 面目の黒色土面発掘調査。	2 区埋填。発掘調査終了。

Ⅱ．遺跡の立地と環境

高崎市は、関東平野の北西部に位置している。市の北西には山々が連なっており、そこを水源とする諸河川は、本市を乗せる前橋台地と呼ばれる台地上を概ね北西方向から南東方向に向かって流れている。市の北西部は榛名山麓の裾野の一部を含み高くなっており、高崎市全体の地形も、河川の流れと同様に北西から南東に向けてゆるやかに低くなっている。

真町は高崎駅から北西へ約 100 m に位置しており、土地区画整理事業の進展に伴い町並みも大きく様変わりしつつある。真町は東西 40 m、南北 215 m 程の小さな範囲の町内である。江戸時代の絵図によれば、高崎藩の組屋敷があって、遠構に沿って南北に細長く、東西方向に屋敷の区画線が描かれている。区画整理事業開始前は、この地割りが生きているような東西方向の路地が数条認められた。

周辺には近世関連の遺跡も確認されている。本遺跡（1）の南側に隣接する真町Ⅰ遺跡では、遠構の堀・土塁を検出している。この他にも近世の武家屋敷跡や、浅間B軽石・洪水等で埋没した水田跡などを検出している。また、現在高崎市役所やシティギャラリーの建つ高崎城三ノ丸遺跡（2）では高崎城の二ノ丸堀や梅ノ木郭堀、弥生時代の方形周溝墓、平安時代の住居跡、中世の堀跡、近代の陸軍歩兵第 15 連隊関係遺構等が検出されている。高松中学校の建つ高崎城Ⅱ遺跡（3）では、赤坂中門前面の土橋部分の調査を行い、土橋の下から石製暗渠が検出された。土橋は地山を掘り残したものでなく、一旦堀として掘り上げた後にその部分を埋め戻して土橋としたものであることが判明した。石製暗渠は、土橋両側の堀と堀を結ぶ埋樋とみられる。三ノ丸遺跡の東に隣接する高崎城東門及び三ノ丸遺跡（4）では、御作事方とみられる近世大型建物跡を検出した。また、三ノ丸土塁の調査を行い、版築状の断面を確認した。平成 8 年度に八島町で行った試掘調査試掘 H 8－71（5）では、「遠構」と思われる堀跡を検出している。東町Ⅴ遺跡（6）では、浅間B軽石下・浅間A軽石下の水田跡及び浅間A軽石降下後の復旧跡、近代の製糸場に関連する遺物が多数出土した。江木諏訪西遺跡（7）では、浅間B軽石下水田及び近世陶磁器類を検出した。



国土地理院発行 1：25000「高崎」を使用

図 1 遺跡分布図



図 2 遺跡の位置と遠構推定ライン

Ⅲ．遺跡の概要と土層

1. 遺跡の概要

●旧石器時代～弥生時代

旧石器時代から弥生時代の遺構・遺物は検出されなかった。

●古墳時代

古墳時代の遺構としては、1区で榛名山二ツ岳噴出の火山灰H r .－F A下の黒色粘性土面を検出した。この面には足跡状の凹みがいくつも確認でき、その中にはH r .－F Aが入っている。黒色粘性土面を直接被覆するのは粒子の細かなやや粘性を持つ褐灰色土である。2区でも同様の黒色粘性土が検出され、大畦畔状のものと溝が確認されている。こちらはH r .－F Aに伴う洪水層で被覆されている。自然科学分析の結果、この黒色土面において水田耕作が行われていたと推定された。また、4世紀初頭に浅間山が噴火して降下したとされるA s .－C混じり土層とその下位層でも自然科学分析したところ、いずれの土層時期においても水田耕作が行われていたことが推定された。

●奈良・平安時代・中世

奈良・平安時代及び中世の遺構・遺物は検出されなかった。

●近世

近世の遺構としては、1・2区で「遠構」と思われる堀跡を検出した。この堀跡の中からは、たくさんの陶磁器類が出土した。また、自然木や加工木、板、木製品、さらに馬の骨や歯も多数検出されている。この付近に組屋敷があった下級武士が関連した馬の骨の可能性も考えられる。出土馬骨を計測すると、体高105.2cmの小型馬、122.0cmの小型馬、127.0cmの中型馬、小型と中型の中間馬などが見られ、年齢的には幼齢馬から老齢馬まで見られるが壮齢馬が多いようである。ほとんどの骨・歯が馬のものであるが、僅かに人骨や犬などの骨も見られる。この他、「遠構」の上層部では、板や杭のような物で護岸をしたと見られる溝や堰状遺構が1・2区で検出された。また付近の溝では、土圧で潰れてはいるが柄杓が完形に近い形で検出された。このほか多数の土坑・溝・ピットなどが検出されている。浅間A軽石の処理溝の一部も検出した。

●近代

近代の遺構としては、1・2区で炭殻を埋め立てたものを検出した。炭殻とは、蒸気機関車から排出される石炭滓のことである。高崎駅周辺の遺跡ではよく検出される。また、2区の北側区画で攪乱を多少受けていたが、東西方向の石列を検出した。石列の南側の面は、非常に堅くしまっており、パイ生地のように剥がれる。

石列の南に接して、雨落ち溝と見られる浅い溝が検出されている。東西方向の道路遺構と思われる。この他、栗石列と土間状の堅い面、トイレ遺構、土管列、煉瓦などの建物遺構・遺物を検出した。

2. 調査区域内の土層

調査区域は南北で40 m程であるため、基本的な土層には大きな変化は見られない。ただ、各時代の遺構の粗密や深さなどで違いが認められる。2区では7層から10層までが榛名山二ツ岳火山灰（H r .－F A）の洪水堆積物層であるが、1区ではこの層が全く確認されない。ただ、1区の7～9層は2区の洪水堆積物層の様相とは異なるものの、やはり水の影響を受けており、特に10層上面では凹みにしかH r .－F Aが検出されないため、H r .－F Aも含めて洪水で流されてしまっているものと見られる。また、2区ではH r .－F Aの洪水層の堆積後にそれらを含めて押し流してしまっている洪水堆積層が確認されている。安定しない地域であったものと見られる。

1・2区ともに遺構面は3面ずつ確認された。第1面は炭殻が多く検出される面とし、1区では4層上面、2区では5層上面を基準とした。第2面は浅間A軽石を多く含み炭粒が混入する面とし、1区では第1面とほぼ同様であるため5層上面を、2区では6層上面を基準とした。第3面は黒色粘性土面とし、1区では10層上面、2区では11層上面を基準として調査を進めた。

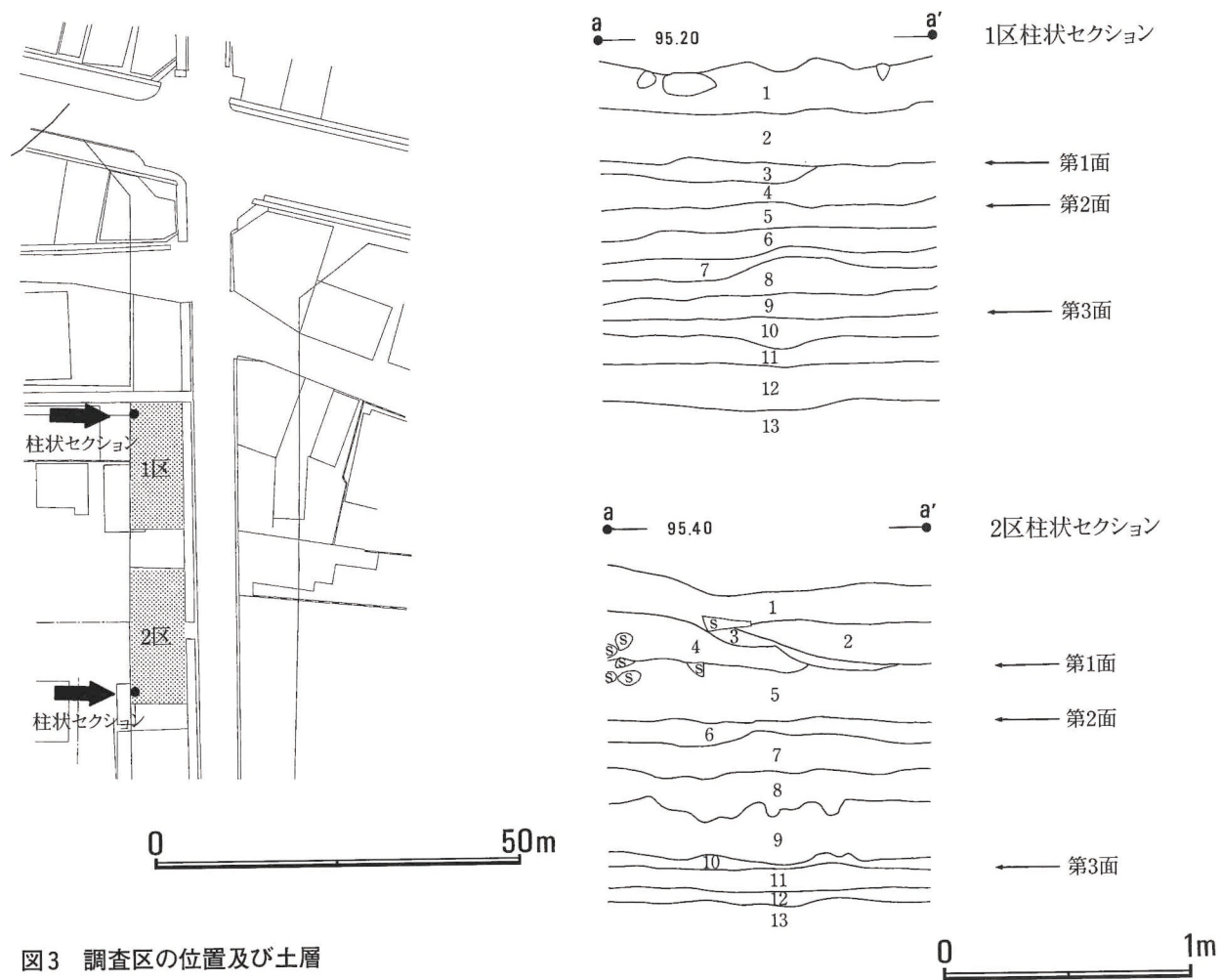


図3 調査区の位置及び土層

1区 柱状セクション

- 黒褐色土(10YR3/1)表土。礫・焼土・炭を含む。
- 黒褐色土(10YR3/1)
As.－A軽石・炭・小礫・若干の焼土粒を含む。
- 黒褐色土(10YR3/2)2層と類似するが、色調やや明るい。
- 黒褐色土(10YR3/2)
As.－A軽石を多く含む土で、若干の炭粒を混入する。
- 褐灰色土(10YR4/1)
As.－A軽石の混入なく、鉄分斑文あり。6層よりやや色調暗い。
- 褐灰色土(10YR4/1)
5層と類似するが粒子が細かくやや粘性をもつ。鉄分斑文あり。
- 灰黄褐色土(10YR4/2)
やや砂質の土、8層よりやや色調暗い。鉄分斑文あり。
- 灰黄褐色土(10YR4/2)
やや砂質だが、7層より粒子が細かく炭粒混入。鉄分斑文あり。
- 褐灰色土(10YR4/1)
粒子の細かい土で、やや粘性をもつ、10層との間に砂が見られる所もある。鉄分斑文あり。
- 黒色土(10YR1.7/1)
粒子緻密な土で強い粘性をもつ、径3～5mm程の灰白色バミスを層の上面付近に含む。1mm程の灰白色粒子も全体的に混じる。
- 灰黄褐色土(10YR4/2)
粒子非常に細かい土で粘性をもつ、径1～2mm程の灰白色バミスを全体的に含む。鉄分斑文あり。
- 褐灰色土(10YR4/1)
粒子非常に細かい土で粘性をもつ、径2～3mm程の灰白色や灰黄褐色のバミスを含む。鉄分斑文あり。
- 褐灰色土(10YR5/1)
粒子非常に細かい土で粘性をもつ、12層に類似するが色調が明るく白っぽい。(シルト層)

2区 柱状セクション

- 現表土。砕石・炭殻を多く含む。
- 炭殻層
- 褐灰色土(10YR4/1)
As.－A軽石・炭殻を含む。
- 黒褐色土(10YR2/2)
粒子の細かい黒色土を主体に、灰黄褐色土小ブロックが混入する。炭粒・灰白色バミスを含む。
- 黒褐色土(10YR3/1)
As.－A軽石を多量に含む土で、炭粒も多く混入する。
- 褐灰色土(10YR4/1)
粒子の細かな土で、7層の微砂が少し混入する。
- 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)
細砂質の土で、若干褐灰色土が混入する。
- 褐灰色微砂(10YR5/1)
微砂層で、鉄分斑文がみられる。
- にぶい黄橙色土(10YR6/3)
粒子の緻密な土で径2～3mmのHr.－F P小粒をわずかに含む。鉄分斑文がみられる。
- 褐灰色土(10YR4/1)
粒子の緻密な土で、しまっている。にぶい黄橙色のHr.－F Aの径1cm以下の小ブロックを含む。
- 黒色土(10YR1.7/1)
粒子の緻密で粘性の強い土。As.－C軽石を含む。10層と同様にHr.－F Aの小ブロックを含む。
- 黒色土(10YR1.7/1)
11層と同様だが、As.－C軽石を含まず、しまっている。
- 黒褐色土(10YR3/2)
粒子緻密で強い粘性を示す。鉄分斑文あり。

IV. 検出した遺構と遺物

1. 第3面の調査

1区

第1面の10号土坑（SK10）調査中に、周壁に厚さ10cm程の黑色粘性土層を確認した。真町I遺跡で浅間B軽石下水田跡に先行する水田跡が検出されており、本遺跡でも予測されたため面的に広げて調査を実施した。現地表下約1.05mで黑色粘性土が現れる。これを被覆するのは、粒子が細かくやや粘性を持つ褐色土で、黑色土との間に薄く砂層が認められる所もある。畦畔は確認されなかったが、イネのプラントオパールが5,200個/g検出されており、稲作が行われていたことが判明している。この面には凹みが多数あり、その中に二ツ岳火山灰（Hr.-FA）が入っており、6世紀初頭に埋没し、その後FAも含めて洪水の影響を受けているものと見られる。

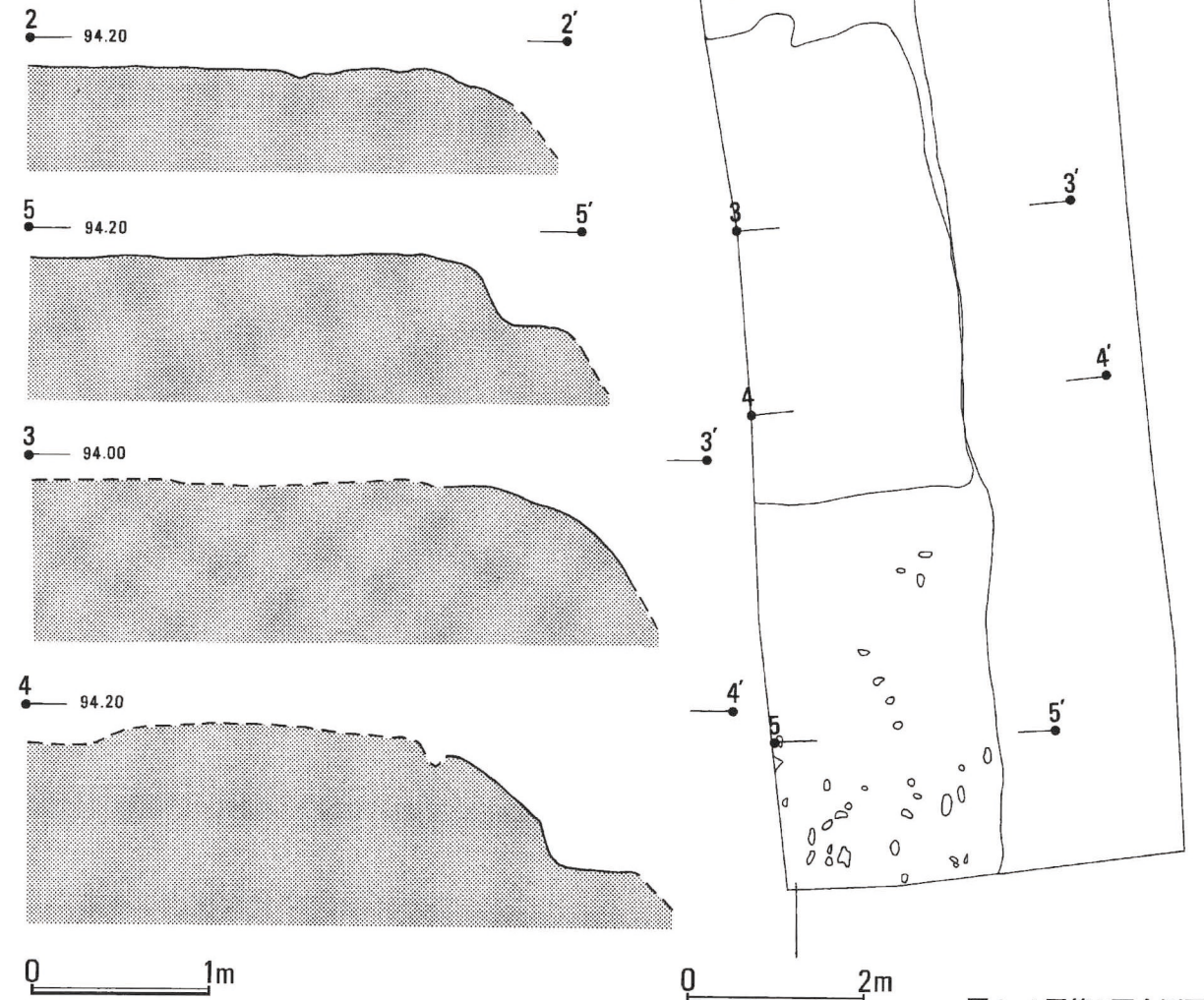


図4 1区第3面全測図

2区

1区とはほぼ同様の現地表下約1.1mで粒子が緻密で粘性の強い黑色土面が検出された。やはり調査区の東半分がSD04で大きく破壊されている。北西端で上幅約40~50cm、下幅約65~75cm、高さ約10cmの大畦畔状のものを検出した。これに沿って北側に上幅約25cm、下幅約10cm、深さ約15cmの溝（SD15）が走る。西壁寄りにも上幅約45~50cm、下幅約20~25cm、深さ約8cm程の溝（SD16）がN-19°-Wの方向で検出された。SD15に平行する大畦畔状のもの以外には、畦畔は検出されなかった。これらはHr.-FAに伴う洪水層で覆われている。洪水堆積層直下の黑色土及びその下層では、それぞれ9,100個/g、11,300個/gとかなり高い密度でイネのプラントオパールが検出されている。水田が営まれていたことが判明した。

SD16の南半分と東側は黑色土面が大きく攪乱されている。これは、Hr.-FAに伴う洪水層が堆積した後、それらも含めて洪水により押し流され、攪乱されたものと判断される。

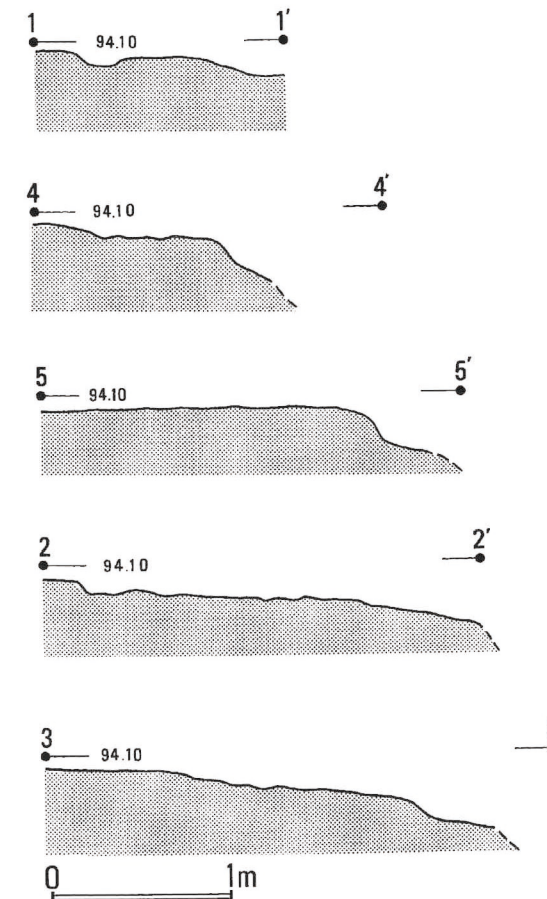


図5 2区第3面全測図

2. 第2面の調査

1区

1区の第2面の調査では、炭殻層下のA s - A 軽石を含む面を調査した。遺構としては、時代が下がりほとんど埋没してしまった「遠構」の上層に、その名残りと思われる溝状遺構のSD 01・SD 02・SD 03と、それに関連すると思われる堰状遺構を検出した。また、ピットや土坑としては、ピット13～19、SK 02内ピット列、SK 12～SK 21を検出した。遺物としては、馬の骨や歯、陶磁器類、柄杓、煉瓦、木片、石などを検出した。

(1) SD 01

SD 01は、調査区の北壁から出て南方向へ走り、途中で東壁に半分食い込み再び西側に出てきたところで止まっている。溝の全長は約8m、深さは約0.2mである。上端の幅は約0.4mで、底部に近づくにつれて狭まり、下端の幅は約0.2mである。また、SK 13・18によって上から溝が壊されている。覆土を見ると、溝の上端から下へ10cm程の層にはA s - A 軽石が多く混入しているが、そこより底部までの層ではA s - A 軽石の混入は見られない。これは、SD 01が形成された後に、溝中の水の流れにより粗砂や粒子の細かい土が堆積し、その後で周辺のA s - A 軽石を多く含む土がSD 01内に入り込んだと思われる。そのため、SD 01はA s - A 軽石の降下後に作られたと思われる。遺物としては、瓦や陶磁器類の破片が出土している。

(2) SD 02

SD 02は、炭殻部であるSK 10の東隣に南北方向に走っている。北端部分は途中で切れており、南端部分は調査区への出入り口の下に入っている。溝の全長は約3.2m、深さは約0.5mである。上端の幅は約0.8mで、底部に近づくにつれ狭まり、下端の幅は約0.45mである。溝中の土層を見ると、底部に近い層は木が混入している砂質土で、上端に近い層では炭粒や粘性土の小ブロックを混入しており、埋められた土と思われる。

また、SD 02の東側に接し、そこから東壁に入っているSD 03がある。SD 03の覆土にはA s - A 軽石の混入が見られるため、A s - A 軽石降下後に形成されたと思われる。SD 02はSD 03を壊して作られており、SD 03よりも後世に作られたと考えられる。

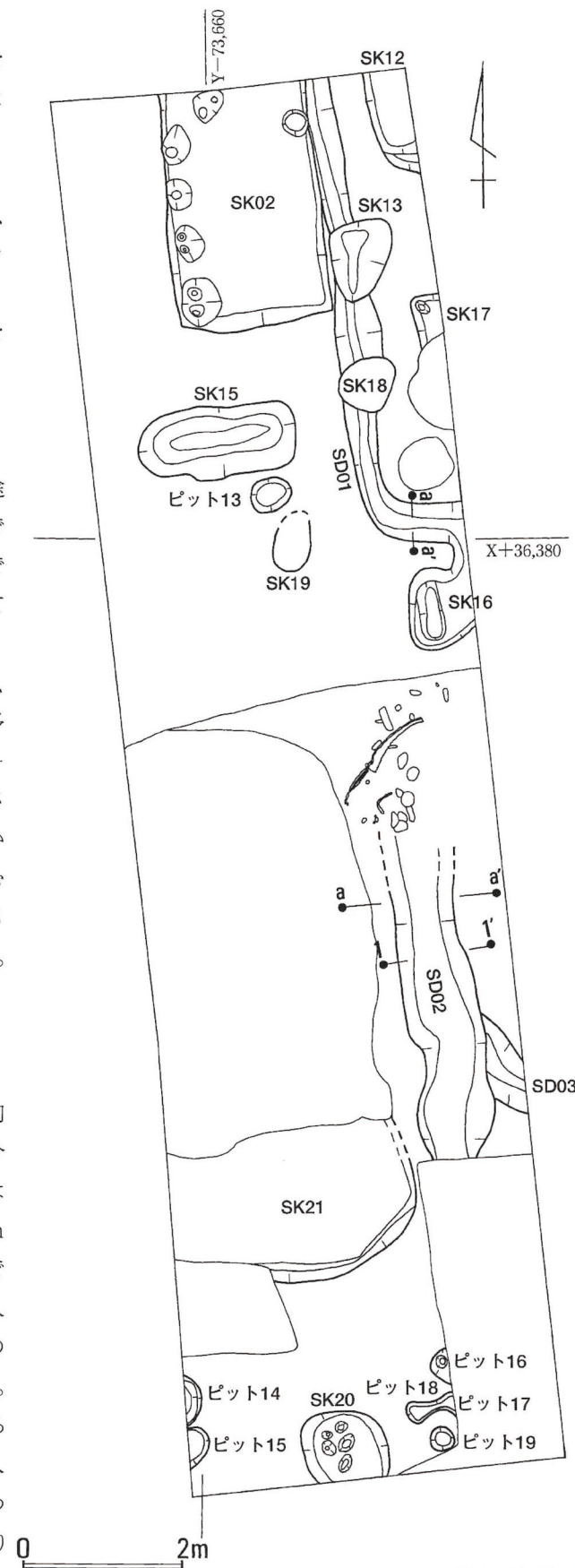
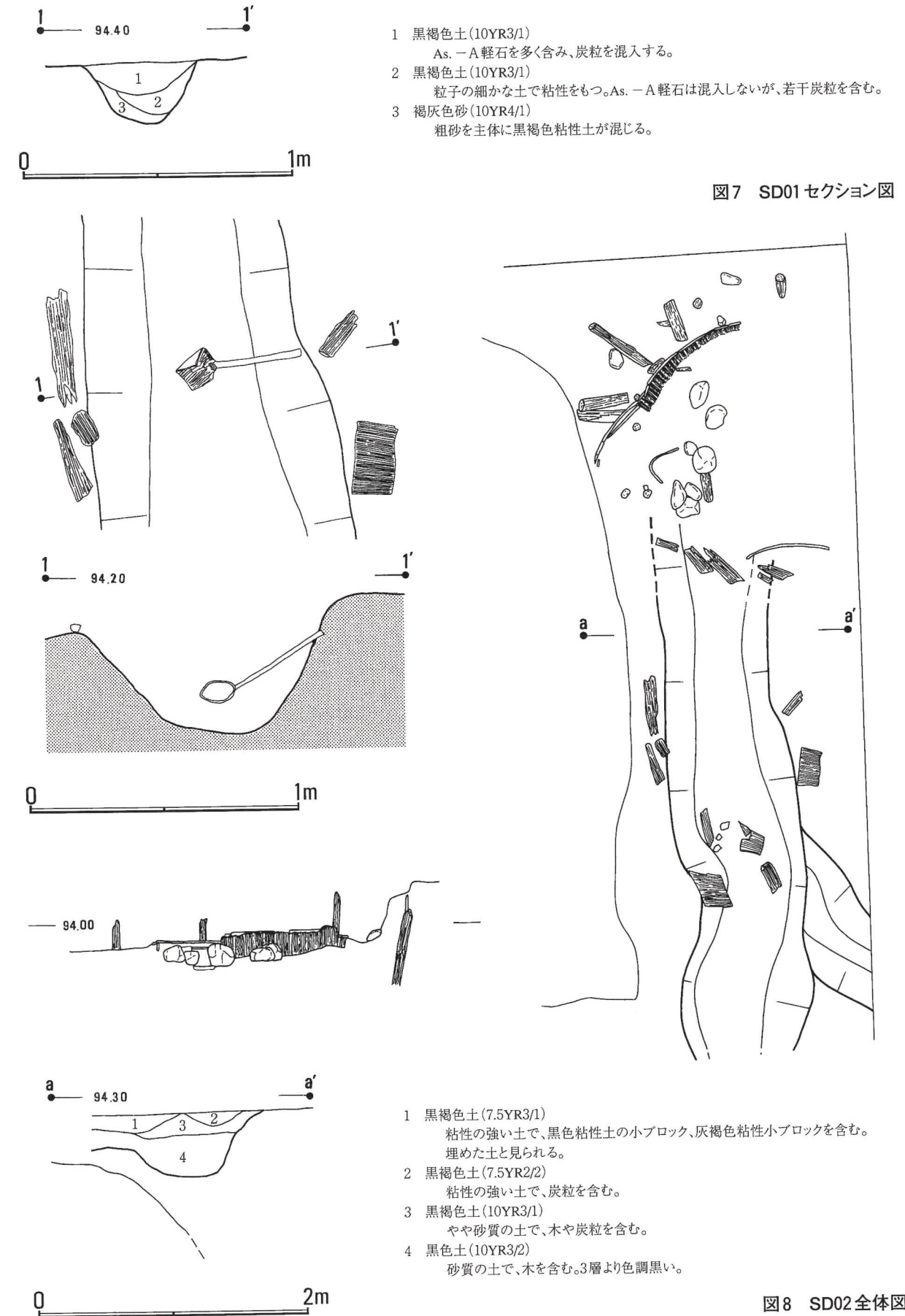


図6 1区第2面全測図



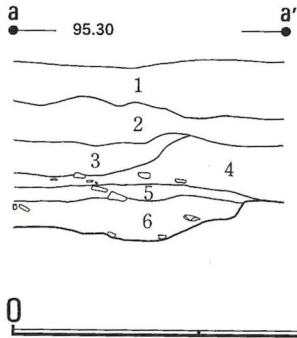
S D 02 内の遺物としては、土圧等で押しつぶされてはいるものの、長さ約 0.46 m の完形に近い柄杓が検出された。その他、陶磁器類、木片、瓦、煉瓦、骨、石などが検出された。また、S D 02 の北端部分は途中で切れているが、その延長上に堰状遺構と思われる遺構が検出された。これは 1 m 程の長さの木の枝 4 ～ 5 本をややカーブするように横向きに重ねて置き、その南側の面に草の茎状のものを縦に並べているものである。茎状のものは横枝の幅いっぱいに面的に検出され、上下方向には 16 ～ 19cm 程確認された。網代状にも見えないことはないが、茎状のものは縦方向のみで横方向には確認できない。木の枝に沿って寄せかけているものと判断される。横方向の枝の両端付近の北側には、直径 7 ～ 8cm の杭を打ち込んで押さえとしている。これらの状況からすると、南からの流れに抗するように作られているとみられる。また、右にカーブしていることから見ると、南からの水の流れを東方向に向きを変えるために設置されたものと推定される。堰状遺構の南側には 20cm 前後の石が 7 石程出土しており、水の流れが直接茎状のものにあたるのをさけるために置かれたものと見られる。堰状のものが検出されるまでに、この付近からは杭や板、丸木などが多数出土しており、構築材あるいは流れてきてとどまったものとも考えられる。

(3) S D 03

S D 03 は、北西方向から南東方向へ延びているが、北西端部は S D 02 の上層部に接し、南東部はそこから直ぐに東壁に入っているため、わずかな部分しか検出されていない。上端の幅は約 0.8 m で、底部に近づくにつれ狭まり、下端の幅は約 0.2 m である。深さは約 0.4 m である。土層を見ると、S D 03 の上端に近い層、及び溝の上にある層には A s - A 軽石の混入が見られるが、底部から中端の層に A s - A 軽石は混入していない。これは、A s - A 軽石降下後に S D 03 が形成され、溝中の水の流れにより砂質土が堆積し、その後に周辺の A s - A 軽石を含む土が流れ込んだと思われる。そのため、S D 03 は A s - A 軽石降下後に形成されたと思われる。S D 02 との関係であるが、S D 02 内には A s - A 軽石が含まれていないため、A s - A 軽石降下後、S D 03 が形成された後に、S D 02 が S D 03 を切る形で作られたと思われる。遺物は、陶器類、木片などが検出されている

(4) S K 12

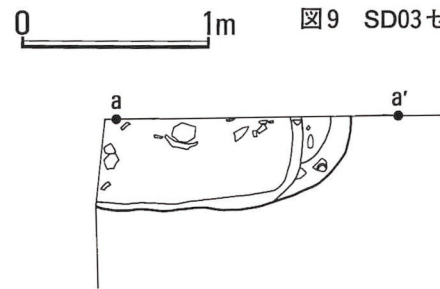
S K 12 は 1 区の北東角にあるが、調査区域の外へ続いているため、土坑全体の様子は確認できなかった。検出した部分は、東西約 0.6 m、南北約 1.2 m、深さ約 0.9 m の四角い部分である。覆土の土層を見ると、A s - A 軽石を多く混入している。そのため、S K 12 は A s - A 軽石の降下後に掘られたものと思われる。



- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 現表土。
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) 炭粒・焼土粒を混入する。
- 3 黒褐色土 (10YR3/2) 炭粒を含む土で、黄褐色土のブロックが混入する。
- 4 黒褐色土 (10YR3/1) As. - A 軽石を含む土で、炭粒・遺物を混入する。
- 5 黒褐色土 (10YR3/1) 4層と同様だが、As. - A 軽石の混入多くなる。
- 6 黒褐色土 (10YR3/1) As. - A 軽石を多量に含む土で、若干炭粒混入する。

図10 SK12全体図

図9 SD03セクション図



- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 灰黄褐色土粒を含み、少量の炭粒・As. - A 軽石を混入する。やや固い。
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) As. - A 軽石・炭粒を多く含み、少量の焼土粒を混入する。
- 3 黒褐色土 (10YR3/2) 2層と類似するが、As. - A 軽石の混入がさらに多い。色調やや明るい。
- 4 黒褐色土 (10YR3/2) As. - A 軽石の混入少なくなり、炭粒はわずかに含まれるのみ。やや軟らかい。
- 5 黒褐色土 (10YR3/2) やや砂質の土で、炭粒はわずかに混入するのみ。鉄分斑文が見られ、最下層には粗砂が堆積する。

遺物としては陶磁器類、瓦、砥石が検出された。

(5) S K 15

S K 15 は S D 01 の西側にあり、東西約 1.9 m、南北約 0.9 m の長方形に近い土坑である。深さは検出面から約 0.3 m で、上端からはほぼ垂直に近い角度で 15 ～ 20cm 程落ち、そこで一旦、幅 10 ～ 20cm 程の段があり、再び約 30° の角度で 10cm 程落ち、土坑底面になる。覆土の状況を見ると、検出面から途中の段がある付近までは、A s - A 軽石を含むやや粘性を持つ黒褐色土である。それ以下は、植物の葉や茎状のもの (4 層) が 2 ～ 5cm の厚さで堆積し、その下は粘性の強い黒色土でノロ状を呈したもの (5 層) が堆積している。底面のほぼ中央には、径 10 ～ 15cm の川原石が 7 石、円筒形の瓦が 1 点まどまって出土しており、5 層により覆われている。4 層は植物の葉や茎状のものが主体をなし、その上に板や自然木、杭などが堆積している。これは、S K 15 は A s - A 軽石降下後に掘られ、5 層が堆積した後に植物主体の 4 層が投げ込まれるかして堆積した。その後に A s - A 軽石を混入した周辺の土が流れ込んだと考えられる。

遺物は、板・茎などの木片を多数検出したほか、軒平瓦や刻印の入った棧瓦、陶磁器類、石などを検出した。

(6) S K 16

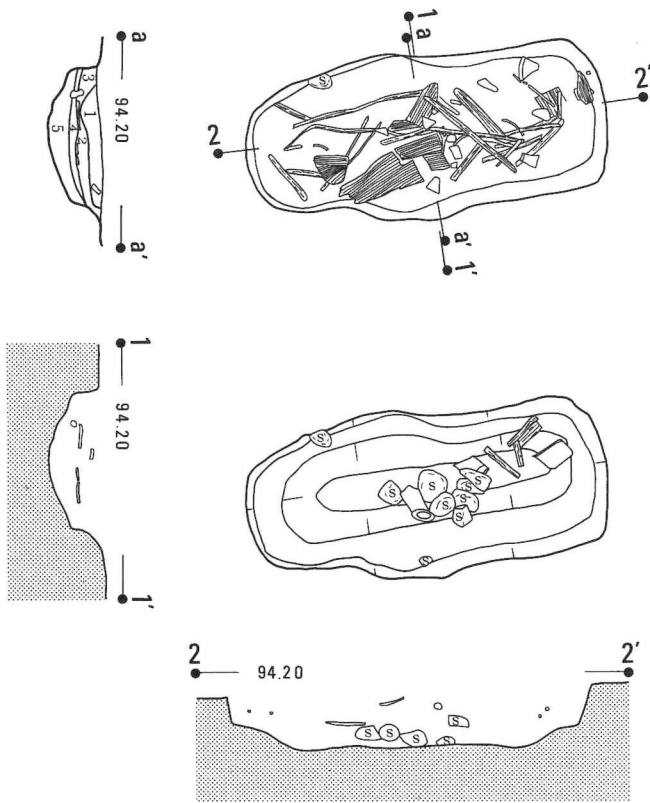
S K 16 は、東西 0.3 m、南北 0.7 m、深さ 0.2 m の土坑で、S D 01 内の南端部分に位置する。覆土を見ると、A s - A 軽石を多く含み、炭粒も少し混入している。遺物としては、陶磁器類、瓦、木片が出土している。

(7) S K 20

S K 20 は、東西 1 m、南北 0.45 m、深さ 0.1 m の丸形に近い土坑である。しかし、南側部分が調査区外へ続いているため、正確な規模は不明である。覆土を見ると、A s - A 軽石を多く含み、炭粒も混入している。遺物としては、馬の骨 (右橈骨・骨の寸法から小型～中型の中間馬と推定) を検出した。

2 区

2 区の 2 面では、近世とみられる面の調査を実施した。遺構としては、1 区と同様、時代が下り、ほとんど埋没してしまった「遠構」の上層やその付近で南北方向の溝が数条検出された。さらに、これらの溝に重複する状況で土坑が検出されている。ピットも検出されているが、列になるものは認められず、建物跡になるものは見られなかった。

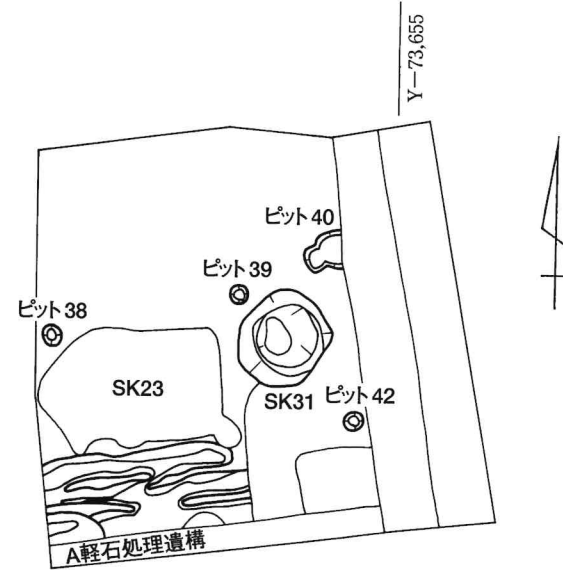


- 1 黒褐色土 (10YR3/1) As. - A 軽石を含むやや粘性をもつ土。
- 2 黒色土 (10YR2/1) As. - A 軽石を含み、やや粘性をもつ。植物が腐植せず残る。臭い。
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) As. - A 軽石を含み、黄褐色土粒を混入する。
- 4 オリーブ黒 (5 Y 3/1) 薄い植物の葉や茎状のものがこの厚さで堆積。腐植せず残る。
- 5 黒色土 (5 Y 2/1) 粘性の強い黒色土でノロ状を呈す。

図11 SK15全体図

(1) S D 06 ～ 11

S D 06は、幅約0.2m、全長約2.2mの南北溝で、深さは約6cmである。覆土は地山に近い土だが、比較的軟らかく、A s－A 軽石・炭粒を多く混入する。S D 07は、長さ約0.8m、幅0.2mの東西溝で、深さは約6cmである。覆土はS D 06と同様である。東西両端は他の遺構によって壊されている。S D 08は、全長約1.5m、幅約0.16mの東西溝で、深さは約2cmである。覆土はS D 06と同様である。S D 09は全長約0.66m、幅約0.2m、深さ約3cmの南北溝である。覆土はS D 06と同様である。S D 10は、長さ約1.16m、幅約0.2m、深さ約2cmの東西溝で、覆土はS D 06と同様である。S D 11は、長さ約3.2m、幅約0.3m、深さ約6cmの南北溝で、覆土はS D 06と同様である。



(2) S D 12・13

S D 12は「遠構」の上位に位置する南北方向の溝で、北はS K 34に重複してさらに調査区外へと続いていく。南も調査区外へと続く。現状で長さ約6m、幅約0.4m、深さ約0.2mである。溝を直接覆うのはA s－A 軽石の二次堆積層で、水の影響を受けている可能性を持っている。A s－A 軽石以外の土などは全く混じらない。遺物は灯明皿が検出されている。S D 13はS D 12と重複するように平行して走る。S D 12と同様に北側はS K 34に切られ、南は調査区外へ伸びる。現状で長さ6m、幅約0.3m、深さ約0.14mである。直接覆うのはA 軽石の二次堆積層で、S D 12と同様であるが、若干黒色化している。S D 12・13は、どちらもA s－A 軽石降下後に掘られたともの考えられる。

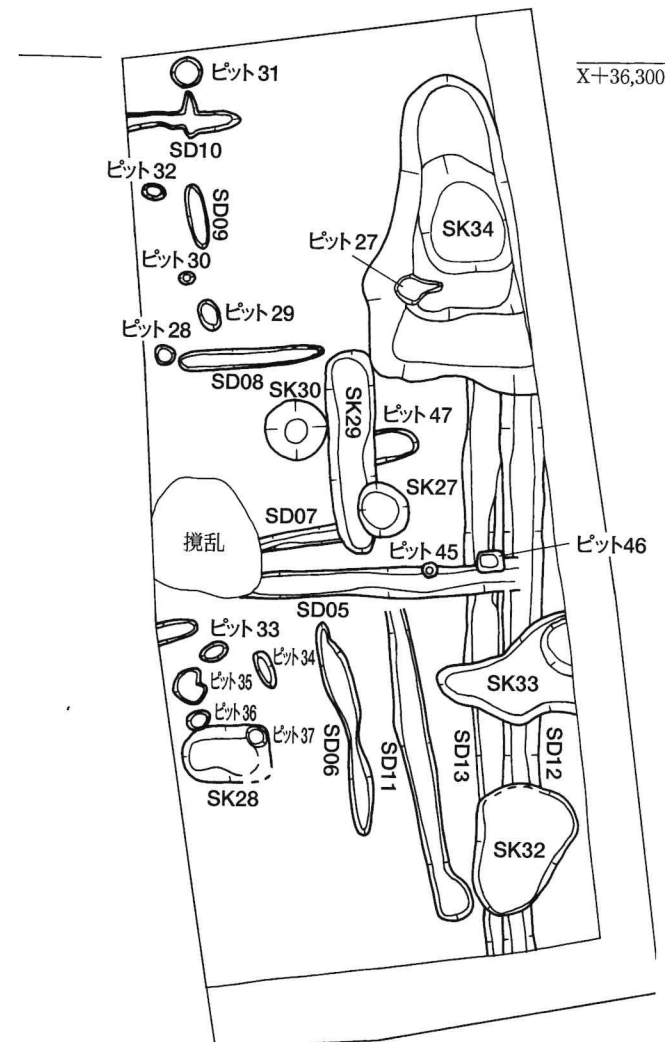
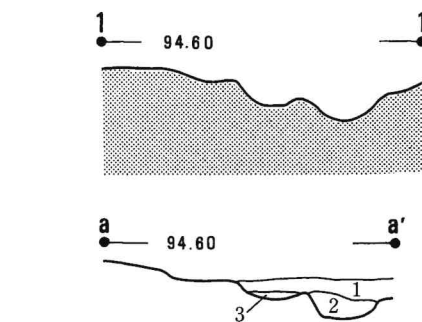
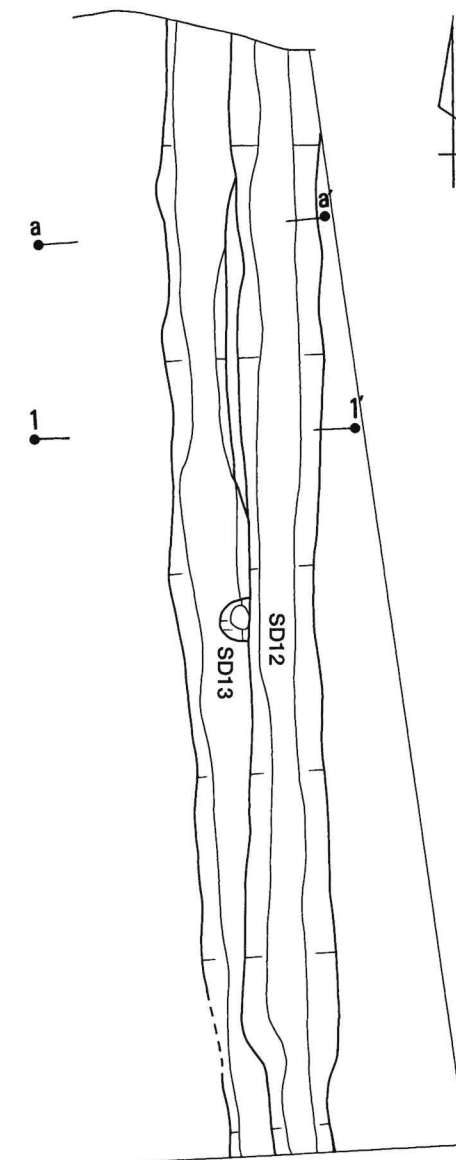


図12 2区第2面全測図

(3) S D 14

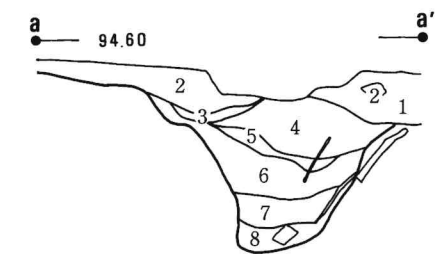
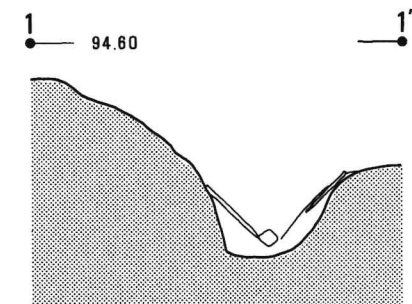
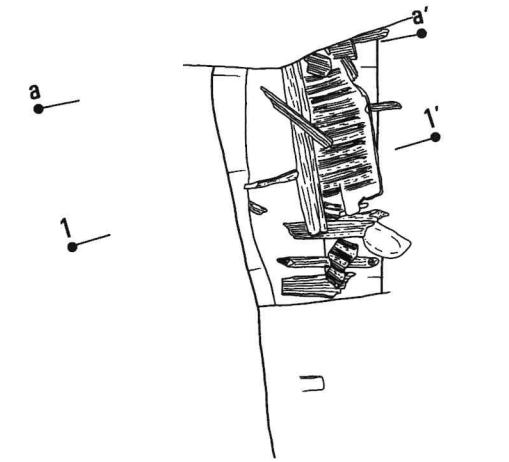
「遠構」の上位で検出された南北方向の溝で、上幅0.9～1m、下幅0.3～0.35m、深さ0.7m程を計測する。北側は調査区外へ続き、南側はS K 34によって切られる。西側立ち上がりは、「遠構」のS D 04の西側立ち上がりを使用している。東側立ち上がりは、0.8×0.3m、厚さ1.5cm程の大きさの板を横に置いて立ち上がりになっている。この板の下位には一辺が8cm程の角材を横に置き、角材と西側斜面との間に4×3×38cm程の木を押し込



- 1 黒褐色土(10YR3/2)
As.－A 軽石を多量に含む土で、やや大きめの炭粒(径6～7mm程)も多く含む。
- 2 As.－A 軽石の2次堆積層。
- 3 As.－A 軽石の2次堆積層だが、やや黒色化している。



図13 SD12・13全体図



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)
As.－A 軽石・焼土小ブロック・炭粒を多量に含む土。軟らかい。
- 2 暗褐色土(10YR3/3)
As.－A 軽石を多量に、炭粒をわずかに混入する。
- 3 黒褐色土(10YR3/2)
As.－A 軽石を多量に含む土で、2層に類似するが色調暗い。
- 4 黒褐色土(10YR3/1)
As.－A 軽石・炭粒・粗砂ブロックを含む土で、やや粘性をもつ。
- 5 褐灰色土(10YR4/2)
粒子の非常に細かい土で、粘性をもつ。
- 6 黒褐色土(2.5 Y 3/1)
As.－A 軽石・微砂を含む土で、植物の茎・根など含む。
- 7 オリーブ黒色土(5 Y 3/1)
As.－A 軽石を含む土でやや粘性をもつ。
- 8 黒色土(5 Y 2/1)
やや粗砂質の土だが少し粘性をもつ。



図14 SD14全体図

んで板が動かないようにしている。東側斜面に沿って板や丸太材が何本か見られることから、さらに南に続いていたと見られる。東側斜面はS D 04の覆土で軟らかいため、このような造作をしたものとみられる。板の面には、1区堰状遺構でみられたような草の茎状のものが網代状に検出されている。

(4) S K 27

S K 27は、東西0.6 m、南北0.6 m、深さ23cmの丸い土坑で、1面目で検出された下甕の下位で検出された。S K 29の東肩の一部を壊して作られている。覆土を見ると、A s－A軽石と炭粒・小石を含んでいるため、A軽石降下後に掘られたと考えられる。遺物としては、陶器片やガラス片が多量に検出された。おそらく、割れたり使われなくなった物をS K 27の中へ廃棄したと考えられる。徳利や湯タンポなどがほぼ元の形に復元できた。徳利には町名・店名・屋号など書かれていた。

(5) S K 28

S K 28は、東西0.9 m、南北0.6 m、深さ5cmの四角い土坑である。覆土を見ると、A s－A軽石と炭粒を含むため、A軽石降下後に掘られたものと思われる。

(6) S K 29

S K 29は、東西0.45 m、南北2.15 m、深さ14cmの、南北方向に細長い土坑である。S D 07とピット47を壊して作られているが、S K 29もS K 27によって壊されている。覆土を見ると、A s－A軽石と炭粒を含むため、A軽石降下後に掘られたものと思われる。遺物は、陶器や瓦が検出された。

(7) S K 30

S K 30は、東西0.6 m、南北0.6 m、深さ20cmの丸い土坑で、S K 29の西に接している。覆土を見ると、A s－A軽石と炭粒を含むため、A軽石降下後に掘られたものと思われる。遺物としては、大甕が土坑内に置かれたような状態で検出された。大甕の体部下位には墨書文字が見られた。

(8) S K 32

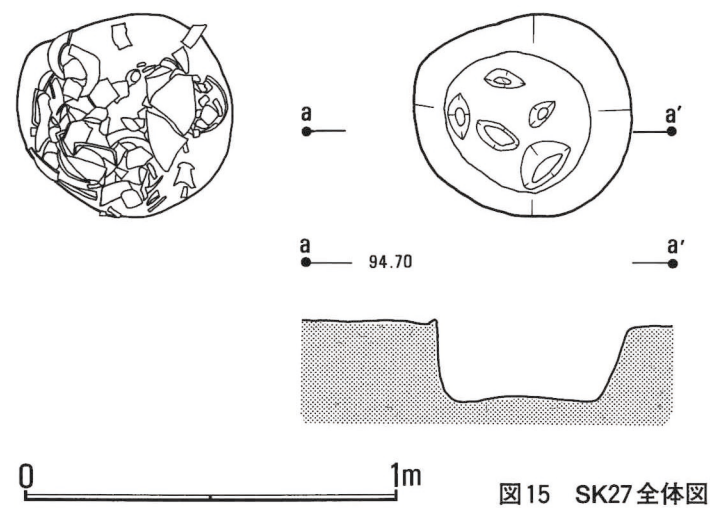


図15 SK27全体図

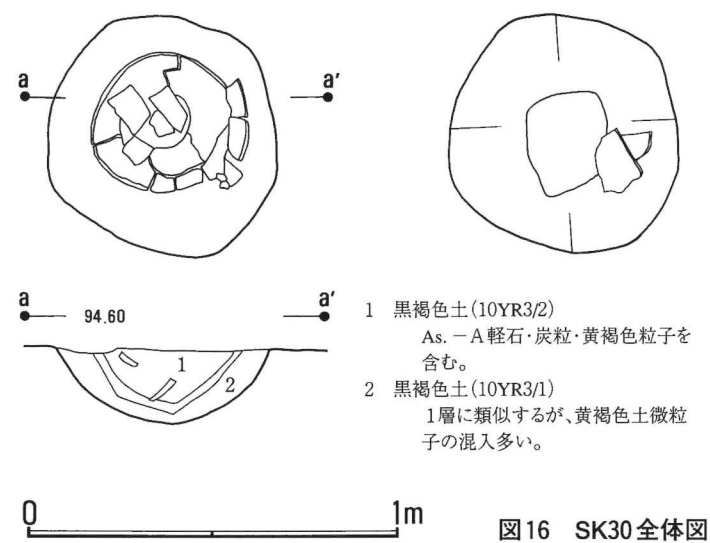


図16 SK30全体図

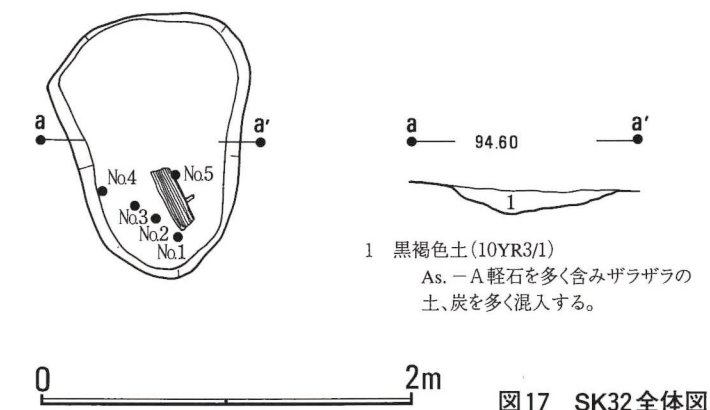


図17 SK32全体図

S K 32は、東西1 m、南北1.4 m、深さ13cmの、ゆがんだ楕円形のような土坑である。S D 12・13を切っている。覆土を見ると、A s－A軽石・炭を多く混入している。遺物としては、陶磁器類、煙管、砥石、木片などを検出した。

(9) S K 33

S K 33は、東西1.4 m、南北1 m、深さ20cmの土坑である。遺構はS D 12・13を切っている。土坑内にピット状のものがあるが、東壁に続いているため規模は不明である。覆土を見ると、A軽石を多く含んでいるため、A軽石降下後に掘られたものである。陶磁器類の破片が検出された。

(10) S K 34

S K 34は、東西1.7 m、南北3.3 m、深さ0.6 mの土坑であるが、遺構は東壁に続いているため、正確な規模は不明である。遺構は、S D 12・13・14を壊して作られており、また、覆土を見るとA s－A軽石を含んでいるため、A軽石降下後に掘られた土坑と考えられる。遺物としては、陶磁器類や瓦、下駄、メンプなどが検出された。また、杭や板などの木片が多量に検出されたが、これはS D 14等の溝の流れを形成していた遺構の残骸や、下駄やメンプのように捨てられたものと思われる。

土坑内にはピット27が重複するが、東西0.5 m、南北0.3 m、深さ3cmの大きさで、覆土はA s－A軽石・炭粒を含む。S K 34の方が先行する。

(11) A軽石処理遺構

この遺構はS K 23の南側にあり、上幅0.2～0.25 m、深さ7cm、長さ5mは現状で2.15 m程の溝が東西方向に

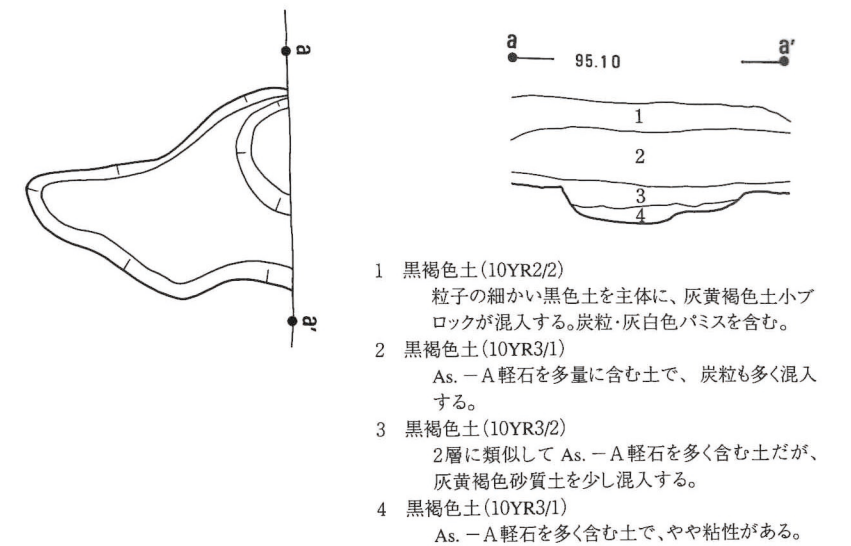


図18 SK33全体図

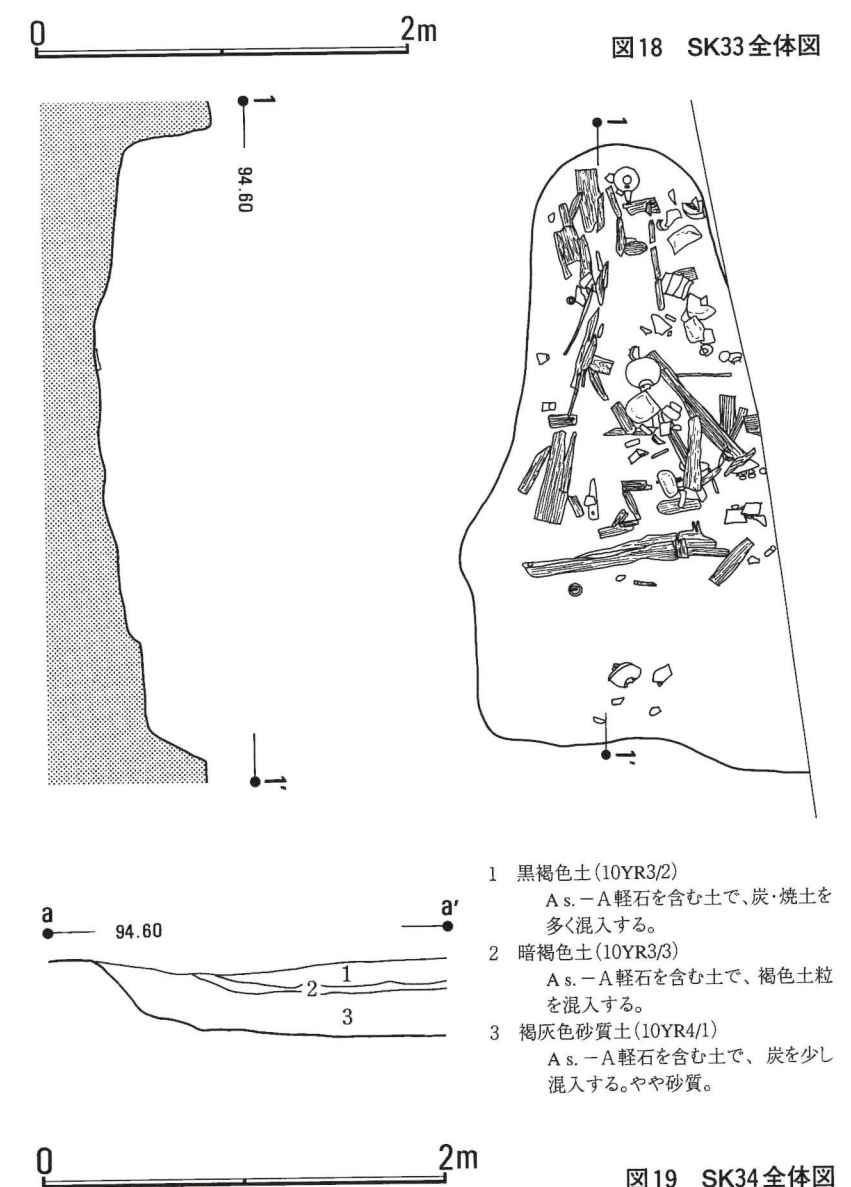


図19 SK34全体図

数条平行して並んでいるものである。溝の西側は西壁、南側はガス管理設部分に続き、北側はS K 23、東側を攪乱によって壊されているので、遺構全体の規模は不明である。覆土を見ると、二次堆積と思われるAs－A軽石を主体に含んでいるため、A軽石を除去して埋めた溝（処理溝）であると思われる。また、この処理遺構の場所は、S D 04の「遠構」の堀の上層と土塁が存在していた部分の一部と思われる。そのため、この遺構が掘られた時点では、既にS D 04「遠構」は大部分が埋没し、土塁のほとんども、本来の形状を保っていないかったと思われる。遺物は検出されなかった。

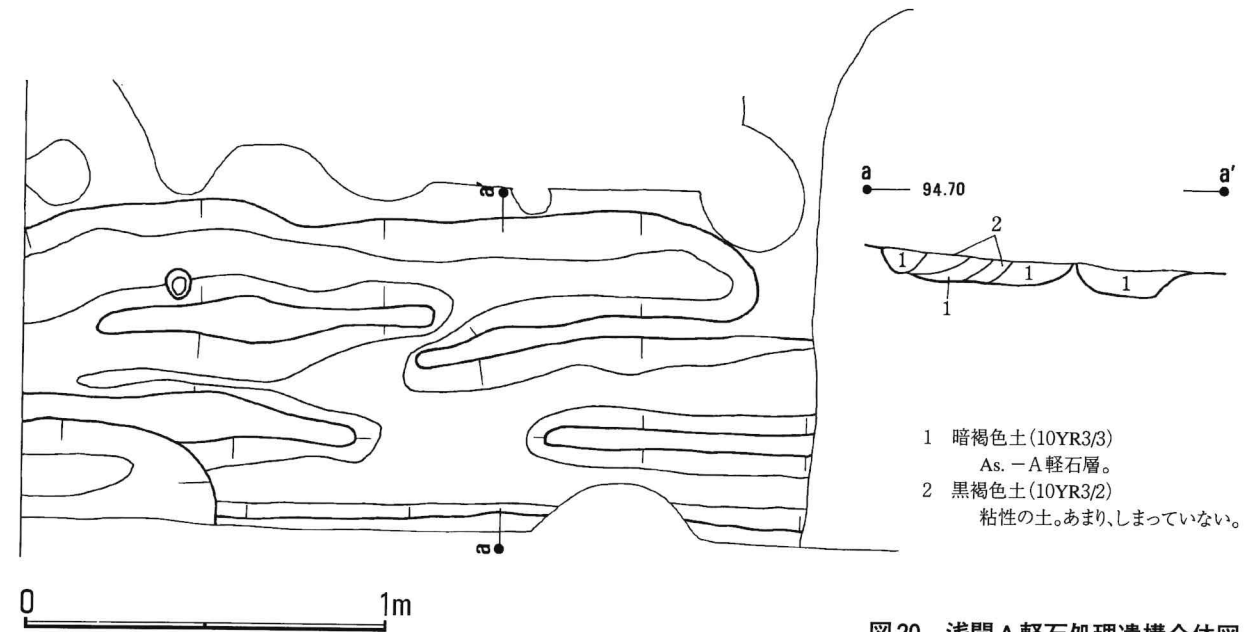


図20 浅間A軽石処理遺構全体図

3. 遠構（S D 04）の調査

今回の調査の大きな目的の一つに高崎の城下町の周囲を区切る「遠構」と呼ばれる堀及び土塁を確認することがあった。「遠構」は絵図を現況を照合すると、ちょうど遺跡の東側を南北に走る東二条線と呼ぶ道路部分に相当していることが指摘されていた。実際、本遺跡の南100 mに位置する真町Ⅰ遺跡では東二条線をトレースするように南北方向に大きな堀跡が確認されている。本遺跡はその北側延長線上にあるため、その堀が続いているのか、そして「遠構」であるかどうかの検証が行える場所でもあった。

1区

調査区に沿って南北方向に堀跡が確認された。検出されたのは堀の西側立ち上がり部分のみで、東側については調査区外の道路側（東二条線）に伸びていて確認できなかった。また、湧水があり、調査区東壁が崩落して危険なため堀底まで発掘できなかった。確認できた堀の規模は、上幅2.1 m以上、深さは、堀底まで発掘できなかったのでピンポールで測定した推定値であるが、検出面より1.35 m程であった。堀は井野川泥流堆積物層である灰白色土を掘り込んで作られている。堀の断面形は、約25°で長さ1.2 m程傾斜し、そこで50～70°と大きく変化する。調査区中程で小規模であるがL字状に曲がる部分がある。覆土の状況は、下位は粗砂を主体にし、径1～3 cm程の小円礫を含む砂質層である。中位は粒子の細かい微砂ないしやや粘性を持つノロ状の土で、腐植しきらない植物や木、板、遺物などを含んでいる。下位・中位は水性堆積であるが、上位は暗褐色系の土で水性堆積ではない。この段階までに離水しているものと見られる。浅間A軽石は含まれない。最上層になると浅間A軽石を多く含み、炭粒を混入する土になる。堀の斜面に近い覆土中から馬の橈骨・大腿骨・上腕骨・中足骨、馬の前臼歯・後臼歯などがバラバラの状態出土している。また、焼かれた人骨の小破片も覆土中から出土している。その他、漆塗りの木製椀が2点発見されている。

2区

2区においても南北方向の堀が検出されている。1区で検出されたものと同様に、調査区の東西幅のほぼ中央付近で西側立ち上がりが確認され、東側立ち上がりはやはり道路の下に入り込んでいく。検出された堀の規模は、上幅2 m以上、深さはピンポールで測定した推定値であるが、検出面から1.30 m程であった。堀は堅くしまった井野川泥流堆積物層の灰白色土まで掘り込んで作られている。堀の断面形は50～70°の傾斜で落ちるもので、場所にもよるが、検出面の肩から0.7～0.8 m程で一度小規模な段ができ、再び同様な傾斜で落ちていく。堀底までは発掘できなかったので、底面の状況は不明である。1区の4号溝（S D 04）のようにL字状に屈曲したりするところは確認されなかった。覆土は基本的に1区と同様の状況で、下位には灰色～褐灰色系の粒子の細かい砂を主体にした層が堆積し、その下部には径1 cm以下の小礫を多く含む層も見られる。中位は黒色～黒褐色系の粒子の非常に細かい砂質土ないしはやや粘性を持つノロ状の土が堆積し、腐植しきらない植物の根や枝、茎、桃核、木製品、板、杭などが多数出土している。上位は黒褐色～褐灰色系の浅間A軽石を含まない土が堆積している。調査区南壁の土層断面の観察によると、この上位の浅間A軽石を含まない褐灰色土を掘り込んで浅間A軽石を処理した溝（S D 12・13）が掘られていることが確認されている。浅間A軽石及び炭粒を混入する土層が検出されるのは、4号溝（S D 04）が埋没しきってからのことである。覆土下位及び中位の土層までは水性堆積であるこ

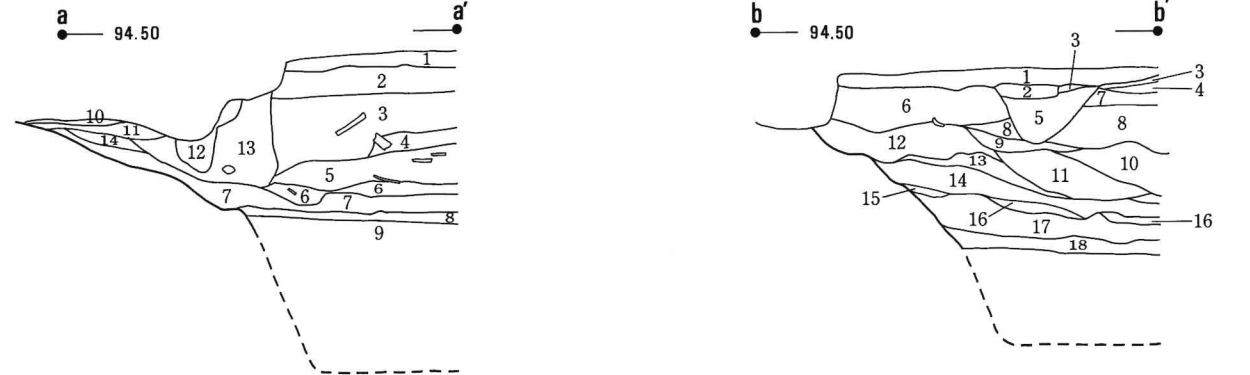


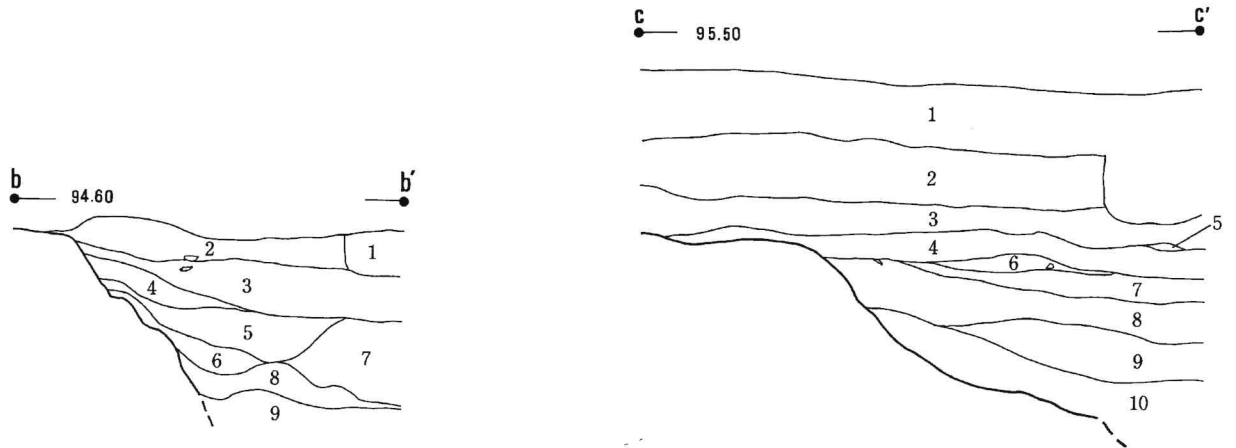
図21 1区SD04セクション図

とも1区の状況と同様である。付図に見るように堀の斜面からは、馬の下顎骨・橈骨・尺骨・大腿骨・肩甲骨・中足骨・距骨、馬の前臼歯や後臼歯、陶器、磁器などが出土している。これらの出土状況を見ると、斜面に沿って西側が高く、東側が低くなっていることが分かる。堀がまだ機能している時期に、西側から投げ入れられたことが推測される。調査区南東隅付近のノロ状の堆積土中からは、多数の板、自然木、加工木、下駄、曲物片、桶底板、漆塗り木製碗、「禁」と墨書された板片などが出土している。

1区・2区で発掘された堀は、走行方向がN-7°-Wと同様で、堀の形状及び覆土の堆積状況などから一連のものであると判断される。また、真町Ⅰ遺跡で検出された堀の走行方向や覆土の堆積状況とも一致していることから同一の堀であり、「遠構」の堀の一部であると考えられる。

真町Ⅰ遺跡では堀の上幅を約5.2m、下幅を1.6～2.1m、深さを1.3～1.5mと推測している。また、堀の西側には地表を削りだして土塁が築かれていたことが判明しているが、本遺跡の範囲内では土塁の存在は確認できなかった。

1区及び2区の4号溝（SD 04）の土層観察によれば、下位覆土は粗砂～細砂の砂を主体にしたもので、小円礫が堆積している部分もあり、流水があったことが把握できる。中位になると粒子の非常に細かい砂質土ないしやや粘性を持つノロ状の堆積土に大きく変化する。この層位からは腐植しきらない植物や桃核、梅核、自然木、板や木製品などが多数出土し、遠構の堀内は流水からよどみに変化していったものと見られる。また、陶磁器などの遺物もこの層位より出土し始めることから、遠構の堀のよどみに不要品を投棄したりするようになったものと判断される。覆土上位は浅間A軽石を含まなく、これを切ってA軽石を処理した溝（SD 12・13）が作られていることから、天明3年（1783）以前に堀はほとんど埋没していたことがわかる。真町Ⅰ遺跡では、降下時期からあまり隔てない時期に堆積したA軽石主体の層の直上に土塁の崩落土が堆積していることが確認されている。天明3年以降であり時期が離れない頃には土塁が崩落したことがわかる。



- | | |
|--|---|
| <p>1 褐灰色軽石（10YR4/1）
As. - A軽石の2次堆積層。SD 12の覆土。</p> <p>2 黒褐色土（10YR3/2）
As. - A軽石・炭粒を多く含む層。</p> <p>3 黒褐色土（10YR3/2）
粒子が非常に細かい土で、わずかに粘性をもつ。炭粒をわずかに含む。
As. - A軽石の混入はない。</p> <p>4 黒褐色土（10YR3/2）
3層とはほぼ同様だが、やや灰色がかかる。粘性もわずかにある。</p> <p>5 黒褐色土（10YR3/2）
粒子の非常に細かい土で、やや粘性をもつ。植物の根や木など混入する。
炭粒は含まない。やや軟らかい。</p> <p>6 黒褐色土（10YR3/1）
粒子の細かい土だが、やや砂質。植物の根などを含む。</p> <p>7 黒褐色土（2.5 Y 3/2）
粒子の非常に細かい土で腐植質。根などを多量に含む。</p> <p>8 黒褐色土（2.5 Y 3/1）
粒子の細かい土で、やや砂を含む。少し粘性をもつ。</p> <p>9 灰色砂（10YR4/1）
細かい砂層で、下位は径1cm以下の小石を含む。</p> | <p>1 現表土、碎石を主体にする。</p> <p>2 黒褐色土（10YR3/1）
As. - A軽石・炭粒を多量に含む土で、焼土粒も少し混入する。</p> <p>3 黒褐色土（10YR3/2）
As. - A軽石を多量に含む土で、炭粒・焼土粒を少し混入する。</p> <p>4 黒褐色土（10YR3/2）
粒子の細かい土で、As. - A軽石をやや多めに含む。炭粒少し混入。</p> <p>5 As. - A軽石</p> <p>6 灰黄褐色土（10YR4/2）
粒子の細かい土で、As. - A軽石・炭粒をわずかに含む。</p> <p>7 褐灰色土（10YR4/1）
粒子大変細かく少し粘性をもつ。As. - A軽石含まない。鉄分斑文あり。</p> <p>8 黒褐色土（10YR3/1）
粒子緻密な土で粘性あり。炭粒含む。</p> <p>9 黒褐色土（10YR3/2）
粒子の細かい土だが、細砂が混じる。鉄分斑文あり。</p> <p>11 黒褐色土（10YR3/1）
粒子緻密で粘性強い。</p> |
|--|---|

図22 2区 SD04 セクション図

昨年、市史編さんのための調査で発見された櫻井一雄家文書の中に高崎城の遠構の土塁にある樹木を調べて描いた「遠御構筋繪図」（文化10年＝1813年）がある。法輪寺と大信寺の間に位置する真町付近の様子を見ると、土塁の範囲を示す線が引かれているが、土塁を示す緑色が着色されていない。また、御長屋と書かれた建物が土塁を示す線の中まで描かれており、この時点では土塁は存在しなかったものと判断される。しかし、堀を示す青色は着色されており、堀は存在していたことになる。

「遠御構筋繪図」の記述によれば、土居幅三間となっており、絵図から読みとる堀幅はその半分に表現されている。真町Ⅰ遺跡での推定堀幅は、上幅5.2mであるから、発掘調査の成果と考えあわせてみてもここに描かれている堀は、当初のものではなく、2区14号溝（SD 14）などのように規模が小さくなって存在していたものを表現しているものと推測される。真町付近の遠構は、18世紀後半頃までに当初の堀はほぼ埋まりきっており、規模が縮小して存在していた。土塁も天明3年（1783）直後には崩されていることが調査から判断される。

遠構の堀（SD 04）からたくさんの獣骨歯が出土している。特に馬の骨・歯が極めて多く、真町Ⅰ遺跡でも同様である。出土状況は堀の西から捨てられた様相を示していることから、周辺で馬を飼っていた可能性を考えて、堀内のノロ土を試料に寄生虫卵分析を実施してみた。回虫卵と鞭虫卵が検出されたが、いずれも低密度で、集落周辺の通常の汚染程度であり、馬の飼養とは結びつかなかった。

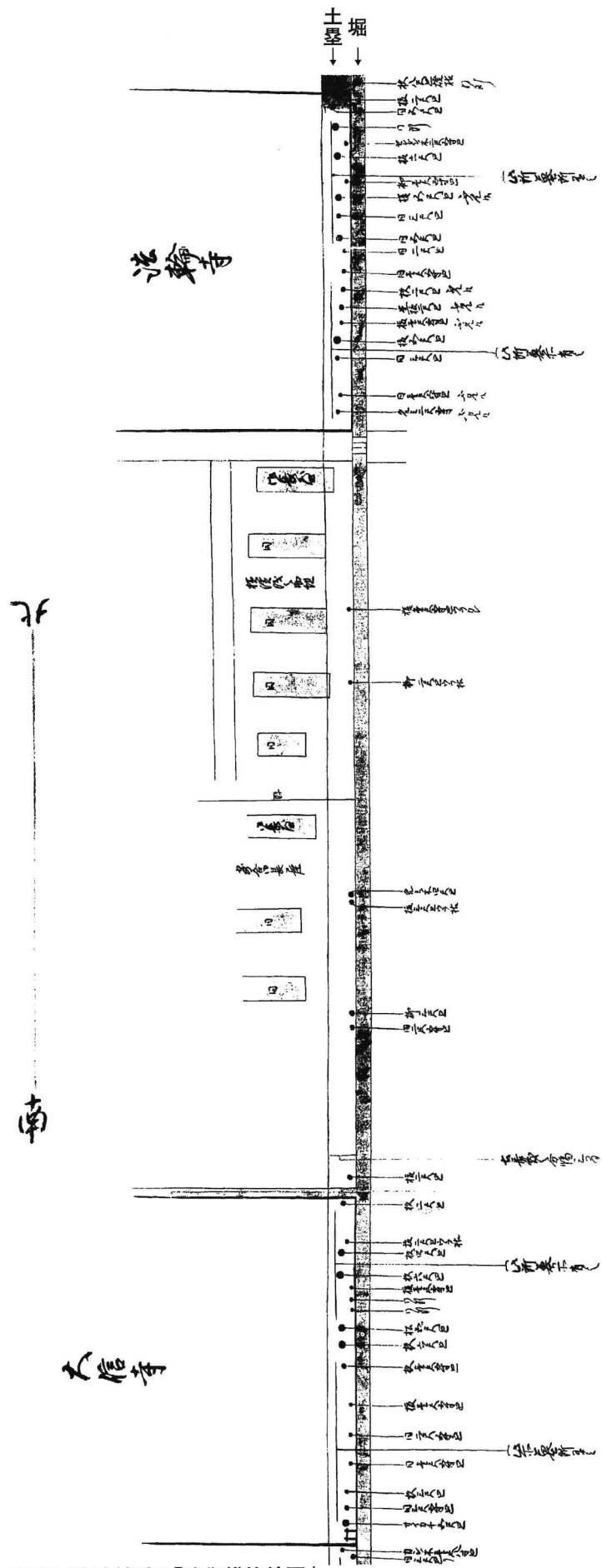


図23 真町Ⅱ遺跡付近の「遠御構筋繪図」